

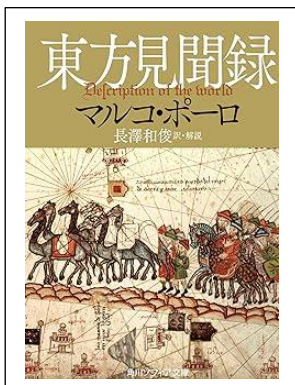
マルコ・ポーロ「東方見聞録」その1

八柳 修之 (会員番号 41)

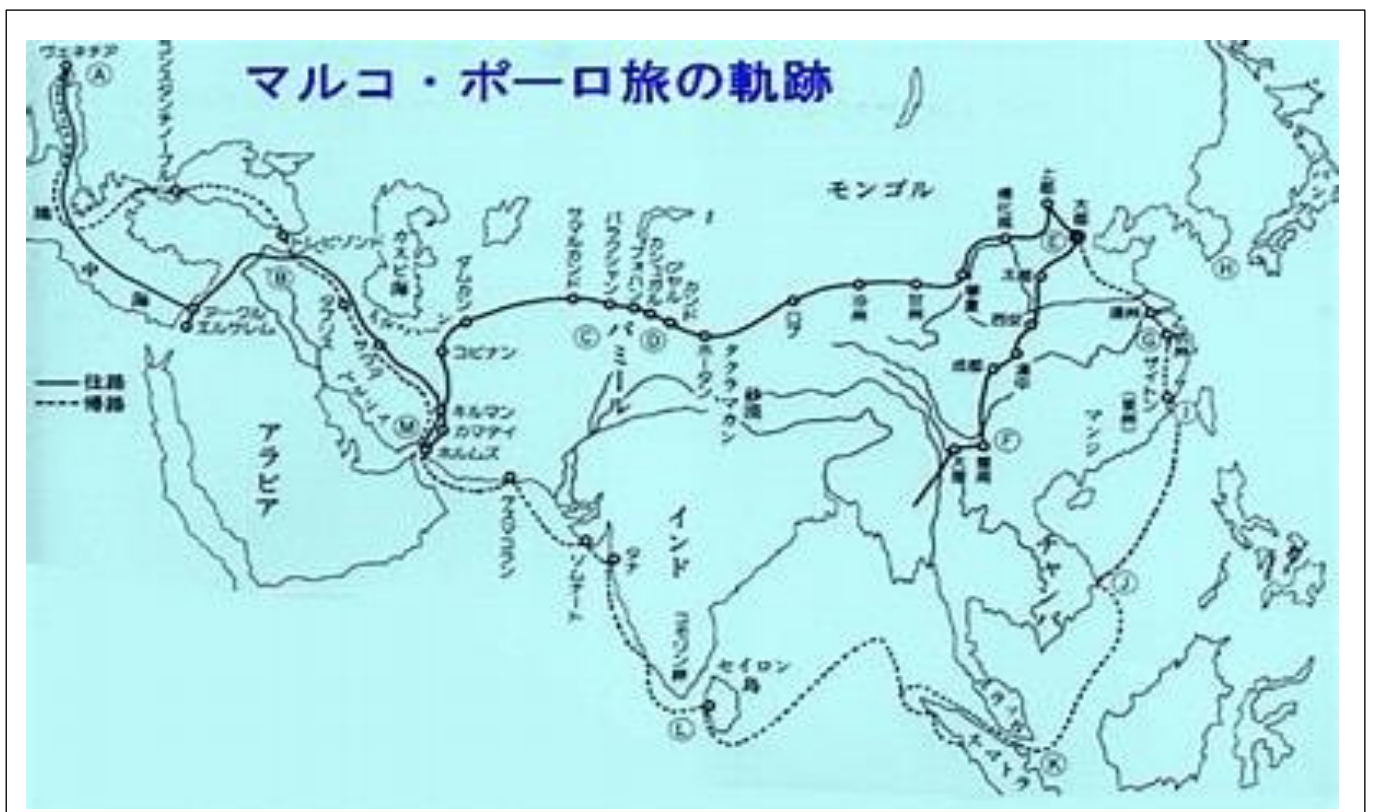
先に世界で最も長い距離を旅行した人としてイブン・パトゥータを紹介したが、その歩いた距離は 28 年間で約 12 万 km と推定されている。(令和 4 年 3 月、当ホームページ参照)

これに匹敵するのは、誰もがご存知の「東方見聞録」で知られるマルコ・ポーロである。

1206 年、チンギス・ハンがモンゴル系・トルコ系の諸民族を統一してモンゴル帝国を形成すると、東西の交通路が整備され東西文化の交流も盛んになった。当時西ヨーロッパは十字軍をおこしていたので、イスラム教徒を征服したモンゴル帝国に関心をもち、ローマ教皇はプラノ・カルビニを、フランス王はブルックを使節としてモンゴル高原に送った。またイタリアの商人マルコ・ポーロは大都にきて元に仕えた。またモロッコの大旅行家イブン・パトゥータも来朝し、「三大大陸周遊記」を著した。マルコ・ポーロは陸路中国に行き 17 年間元朝に仕えたのち海路で帰国した。彼の談話に基づく「世界の記述」(東方見聞録)は、ヨーロッパ人の好奇心をかき立てた。この書で日本が黄金の島ジパングとしてヨーロッパ人にはじめて紹介された。コロンブスも西航以前にこれを読んでいたといわれる。(以上、村川堅太郎、林健太郎、江上波夫監修、詳説「世界史」1988 年版より抜粋)



「東方見聞録」は高校時代、夏休みの課題として読んだことがあったが、記憶にあるのはジパングに関することだけであまり覚えていない。70 年後、86 歳にして挑戦してみることにした。マルコ・ポーロの旅行記は様々な翻訳、解説書があるが、長沢和俊訳・解説の「東方見聞録」(角川文庫)を読むことにした。著者長沢(早大教授)は昭和 38 年(1963)から 50 回近くシルクロードの各地を旅行しており、現代の旅人の目から見た「東方見聞録」とはどんなものか、現実の旅からマルコ・ポーロの旅を再検討したとあったからであった。ロングを歩いておられる方一読をお勧めします。



画像は無料画像より、以下同じ

マルコ・ポーロの旅のあらまし

1260年、マルコ・ポーロの父ニコロ・ポーロとその弟のマッチ・ポーロの二人の兄弟は、一儲けするため大量の宝石を買い込み船でヴェネツィアからコンスタンチノーブル、ソルダイア、ブルガルを経て、プハラに至った。



ヴェネツィア 無料画像 以下同じ

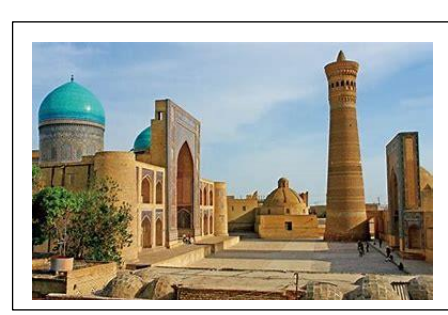
(略図画像：長沢和俊 東方見聞録による)



コンスタンチノーブル



ソルダイア



プハラ

コンスタンチノーブル（現在のイスタンブール）は東ローマ帝国の首都であったが、1453年、オスマン帝国のメフト2世によって陥落した。ニコロ・ポーロ、マッチ・ポーロの二人は、海路、ヴェネツィアからコンスタンチノーブルに向かった。因みにこの間、陸路では約1,100 kmある。

ソルダイア（写真中央）は13世紀初頭からヴェネツィア商人は黒海方面に出向いて、クリミア半島のソルダイアを拠点に交易を行った。ポーロ一家はソルダイアの海港に屋敷を持ち、そこを拠点に6年半過ごした。二人はもっと先へ行った方がよいと考え北に向かった。二人はタルタル人（韃靼）のルカ・ハーンの宮廷に着いた。王はニコロ兄弟の到来を歓待し、兄弟は持って来た宝石をすべて献上した。ハーンは大変満足し、その価格の2倍もの返礼を与えた。滞在すること1年、内戦が起こりバルカ国のウカカ、さらにヴォルガ河を渡り、17日間かかって砂漠を横断した。この間は町も村もなく、僅かにタルタル人が家畜の群れを連れた遊牧民を見ただけであった。砂漠を横断した二人は、プハラという大都市に着いた。

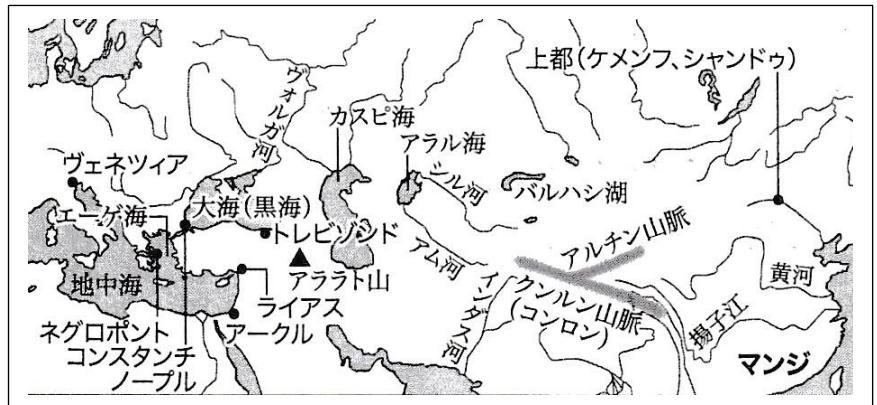
プハラはペルシア全土でもっとも壮麗な町でバラク王の支配下にあった。黄金期は9世紀、イスラム王朝の下各地から優秀な宗教者や商人が集まった。現在、ウズベキスタンの重要・観光都市、古代からサマルカンドと並び中央アジアにおける最も重要な都市である。マルコ・ポーロ兄弟はここで進むことも帰ることもできなくなり3年間滞在した。二人の滞在中、大君フビライのから派遣された使節がこの町にやって来た。この使節はたまた

まニコロ兄弟に会った。使節は実は大ハーンは一度もラテン人を見たことがないので、ぜひ見たいと思っておられる。一緒に来ていただければ非常にお喜びになられ、名誉と恩賞の品を下さるだろう。と言った。ニコロ兄弟は大いに喜んでイル・ハーン国の使節について同行すると答えた。

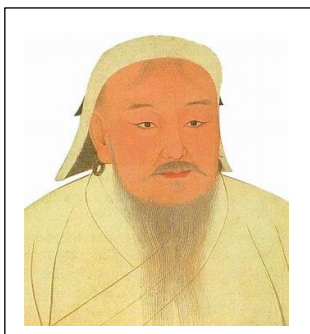
ニコロ兄弟はイル・ハーン国の使節に連れられてプハラを出発しフビライ・ハーンの宮廷に向かった。一年間の旅を続け、大ハーンの宮廷に到着した。(のち、マルコが同じものを見たので後述)。フビライ・ハーン (1260～94 在位) は手厚く迎え、色々な質問をした。ヨーロッパの皇帝、王、諸侯たちがどう国を治めているか、軍事行動、ラテン人の風習・生活の隅々まで聞いた。ニコロ兄弟は、タルタル語やトルコ語も話せたので、これらの質問に的確に答え、ハーンは大変喜び満足させた。そしてハーンはローマ教皇のもとに彼らを使節として派遣しようと考え、一人の貴族、コダカルを連れて行くよう頼み兄弟は同意した。教皇宛ての書簡にはキリスト教教理に精通した 100 名の人を派遣してもらいたいと認めてあった。



上都 元朝の首都 現在は草原の中
北京から北へ 275 km



大ハーンは彼らに金牌 (国内の駅で馬が自由に使えるよう皇帝が使臣に与えた通行手形的一种) を与えた。この金牌には三人が旅行中、必要な宿舎、乗馬、護衛が供給される権利が記されている。ところが出発後間もなく同行のコダカルが病気にかかり、二人だけで旅を続けた。兄弟はアルメリアのライアスに着くまで、3年にもわたる長い騎馬の旅を続けた。時には大河のため徒歩によらねばならなかった。ライアスからアークルに着いたのは 1269 年 4 月であった。しかし、ここで教皇クレメント 4 世の死を知った。やむなくエジプト駐在の教皇の全権使節に行き使命の話をした。全権使節は非常に驚いたが、全キリスト教徒にとって名誉なことであり、新教皇が選ばれるまでを利用して一旦、家族に会うため、ヴェネツィアに帰ることにした。ネグロポントまで歩き、そこから海路、ヴェネツィアに帰った。そのとき、はじめてニコロは妻が 15 歳になる息子マルコを残して亡くなったことを知った。このマルコこそ「東方見聞録」の口述者である。兄弟は 2 年あまり新教皇の選出を待ったが、決まらず、これ以上、ハーンのもとに帰るのを遅らせるわけにはいかなかった。



写真はチンギスハン (在位 1206 年～1227) 66 歳で没

そこで、1270 年の暮に年兄弟はマルコを連れて、ヴェネツィアを発ち、アークルに行き全権大使と会った。大ハーンは母親がキリスト教徒であったので、エルサレムに行きキリストの墓から聖油を手に入れ、アークルを発ってライアスに戻った。このとき、全権大使が教皇に選ばれグレゴリス 10 世の名を継ぐことになっていた。新教皇は優秀な二人の僧を選び、教皇と同様な権限を付与し、大ハーン宛ての親書、水晶など豪華な大ハーンへの贈り物を用意し出発させた。

ところが、ライアスに着くと、バビロンでスルタンなどの大軍が襲い怖れて引き

その後、ニコロ兄弟はマルコを連れて、馬に乗って旅を続け、3年の歳月を要してついに大ハーンの宮廷のある

ケメンフに着いた。大ハーンはニコロが帰って来ると聞いて、40日行程も先へ使者を送って出迎えさせた。大ハーンはマルコ兄弟が戻って来たこと、教皇からの親書と聖油を受け取り喜んだ。とにかくこの使者たちの帰還は、大ハーンをはじめ宮廷に大きな喜びをもたらした。三人は何一つ不自由なく手厚く待遇され、大ハーンの宮廷に仕え貴族たちの劣らぬ栄誉を受けた。ニコロの息子マルコはまもなくタルタル人の風習、四種の言語、文字の読み書きを覚えてしまった。大ハーンは彼の善良さと有能さを認めて大変寵愛、やがてマルコはハーンの使節として活躍することになる。その前に1270年の暮からマルコ等3人が3年の歳月をかけて東方へ旅した記録、マルコが17年余、大ハーンに仕えた記録は以下に要約する。関心のある方は読んで下さい。この項 完

原文では距離はマイル表示となっておりますが、1マイル=1.6kmに換算しています。

画像は無料画像を使用していますが、当時の画像と異なっていると思われるものが多々あります。